



教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (11月5-6日開催)



今年度のフォーラムは、「新しい時代の教育実践をめざして」というテーマを掲げ開催された。初日の「教育実践と省察のコミュニティ」では、右記ポスター発表、院生のポスター発表に関する討論・総括、文部科学省の石田有記氏による学習指導要領改訂の動向に関する講演、福井大学教育学部附属中学校の牧田秀昭氏による授業づくりの変革に関する講演が行われ、2日目の「実践研究 長崎ラウンドテーブル」と合わせて、今日の教育課題に関する知見を深め、実践と研究を往還する有意義な機会となった。

【プログラム】

- 11月5日(土)
 - 9:00~10:20 教育学部教員・附属学校園教員・研究協力教員等ポスターセッション
 - 10:30~12:00 教職大学院学生ポスターセッション
 - 13:00~14:00 教育実践研究シンポジウム-大学院生ポスターセッションに関する討論・総括
 - 14:10~15:40 講演Ⅰ 石田有記氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課 教育課程企画室専門官)「学習指導要領改訂の動向について-中央教育審議会での審議経過と今後の方向性」
 - 15:50~17:00 講演Ⅱ 牧田秀昭氏(福井大学教育学部附属中学校副校長)「授業づくりの変革-「教える専門家」から「学びの専門家」へ」
- 11月6日(日)
 - 9:00~12:30 実践研究 長崎ラウンドテーブル(教育実践を少数人グループで話し合う探求の場)

ポスターセッション



ポスター発表は、前半は教員等による19の発表があり、後半は大学院生による32の発表があった。前半は、大学や附属学校園、各地の学校の教員等が発表し、共同発表が多くを占めた。共同発表では、各学校園内、各学級と大学、異なる学校園の教員による発表など、多様な研究体制がみられた。後半の大学院生の発表は、教育実習等にもつづいた教育実践研究のこれまでの成果、そして今後の展望が示されていた。今年の発表は、昨年とは異なるはじめての教室で行われたが、昨年同様多くの来場があり、さまざまな感想や質問・意見を発表者にぶつけ、発表者もそれに応答し、熱気を感じたりとりがみられた。私自身も発表者の一人だったが、専門が異なる教員や大学院生が数多く集まってくださり、新鮮で有意義な意見交換に近い距離で行うことができた。

(教育学部教員 土肥 大次郎)

子ども理解・特別支援教育実践コース 平野 晶子

教職大学院ならではの実践的な研究内容を拝見することができ、非常に良い時間を過ごすことが出来た。1ケースの児童や生徒の発達等を追って研究しているものから、教科毎や学級全体の研究を行っているものまで、多岐にわたる先生方の実践研究が実践研究を行っていることが分かった。ポスターセッションに参加して、様々な専攻の方々の研究内容に触れることを経験した今、改めて、教職大学院生としての学びの在り方を考える良い機会になったと感じている。新たに発見できた今後の課題や自身の専攻等を踏まえ、実践研究に活かしていきたいと考える。

子ども理解・特別支援教育実践コース 田添 智美

ポスターセッションは、現在自分が取り組んでいる実践研究を他の実践研究と結びつけながら多角的に考えることができる点が魅力であると実感した。また、教育に携わる立場や環境、経験がそれぞれ異なる発表者が実践研究の成果を聞き合うからこそ、互いに新しい考え方や発見があるとともに、多様な視点から課題の解決に向けての手立てや考えを深めることができる。さらに、発表者と参加者の距離が近いという点が発見を交換することができ、とても有意義な場であった。本日の学びを生かしながら、今後の実践研究に取り組んでいきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 金原 亮介

学習指導要領改訂の動向について、文部科学省初等中等教育局教育課程課の石田有記氏よりお話をいただいた。そのなかで特に印象に残っているのは、「社会に開かれた教育課程」を実現するということである。これは、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むというものである。この目標を達成するためには、大人も子どもと一緒に成長しようという意識が重要になると感じた。これから求められる能力を今の大人が獲得しているとは思えないからである。

子ども理解・特別支援教育実践コース 安原 知也

平成30年度より新たな学習指導要領での教育が開始される。今後、教員として現場に出る私にとって、学習指導要領の理解は必要不可欠である。今回の学習指導要領の改訂により、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現すること、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けることができる子どもを育てることが求められていると分かった。興味や関心を持ち、思わず考えたくなるような授業を展開していけるよう、学んでいきたいと思った。

子ども理解・特別支援教育実践コース 山下 実咲

「授業で、二度と同じことは起こらない。」という言葉が印象的であった。「教える専門家」ではなく「学びの専門家」として、教師はどうあるべきなのか。安易にはできない「授業改善」の力を磨いていくことの大切さについて考えさせられた講演だった。アクティブ・ラーニングについては、教員に「どんな発言にも価値を見出す」という覚悟と技術があること、それが「対話的で深い学び」の実現につながるということを感じた。そして、まずは教員自身が、主体的・対話的で協働的な学びのコミュニティを築いていくことが大切だと感じた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 池山 莉央

本講演において、「学びの専門家」へのプロセスを学んだ。その中で、「まずは教師が学習内容を徹底的にほれ込むこと」という言葉が印象に残った。その上で授業のねらいとその意図をしっかりと持って臨むことが、子ども達の表情や動きを引き出すことにつながると感じた。目の前の一刻一刻と変化していく子ども達に対し、授業は再生不可能であるという意識を持ち、「説明できる授業」を行ってみたい。今後、実践学習の場を生かし、教師としての力量形成に努めたい。

学級経営・授業実践開発コース 木下 卓哉

初めてポスター発表に参加させていただいたが、自分にとって学びのある時間となった。オープンスペースで参加者が自由に見回れるシステムだったので、今まで勉強する機会がなかった他の校種や教科、研究の中で自分が「知りたい」と思ったことについて、いろいろと学ぶことが出来た。また、内容以外でも、実践研究を行う上での視点の持ち方や先行研究の使い方、まとめ方、「研究の進め方」という視点からの学びも多くあった。自分の研究の参考になり、視野を広げたい機会にもなったと感じたので、次回のポスター発表にも参加したいと思った。

学級経営・授業実践開発コース 溝手 浩太郎

ポスター発表は、附属校の先生方や院生の先輩の実践研究についての報告を聞き、今後の研究活動について議論することができたため、とても有意義な時間であったと思われる。発表者との距離が近く、質問や討論を行いやすい環境であるため、個々が目指している実践研究について、発表者と観覧者が一緒に吟味できるという点がポスター発表の良さではないだろうか。来年、私は発表者としてポスターセッションの場に立つことになる。多くの参加者とともに考え、深めることができる話題を提供できるように、これからも実践と省察を繰り返していきたい。

学級経営・授業実践開発コース 加藤 めぐみ

これまで学習指導要領改訂の動向について、教育課程部から出される論点整理を中心に、自分なりに解釈し理解しようと努めてきたが、一つ一つの言葉を、自分の中で構造的に理解するのが難しく考えていた。今回基調講演を聴いたことで、新しい学習指導要領が目指すものやその背景について、頭が整理されていくのを感じた。特に印象に残ったのは、「なぜ」を追究する過程を通じて、生きて働く知識として習得されるべきである、これまでで社会科の授業実践を中心に大事にできたことを、今後も進んでいくよう押し付けられているような気持ちになった。

学級経営・授業実践開発コース 寺園 康秀

今回の講演で特に気になる内容があった。1つは「深い学び」と「見方・考え方」を育てるために効果的だと考えられる、AL(アクティブ・ラーニング)の導入についてである。ALを通して他者と概念や考え方を共有することは、新しい自分の発見や多様な視点・考え方を育むきっかけの一つになると思った。2つ目は、カリキュラム・マネジメントについてである。個々の教科毎での学びは、本来教科間で学びの繋がりがあって然るべきである。今後生徒の深い学びを促していくうえでも、教科横断的な教育内容の見直しが必要だと改めて実感できた。

学級経営・授業実践開発コース 入江 亮生

牧田先生の講演では、授業づくりの視点や授業観についてのお話をいただいた。その中で、自分は授業を行う際、自身の都合で授業を作り、実施していることに気づいた。学びは子どもにとってはすべてが新鮮なものでもあるに聞かず、教師の都合で「これは大切」「これは重要でいい」と軽重をつけ、子どもの意見をないがしろにする場面が今まで多くあった。しかし、それは教師の都合である。子どもの興味やベクトルを大切にし、子どもを中心に据えて授業を行う。その中で何が大切なのか子どもが学ぶ。それが授業として大切であると感じた。

学級経営・授業実践開発コース 生島 夏希

今回、授業力向上についての講演を拝聴し、一つの授業を創り出すことの奥深さを改めて実感した。本講演を通して、子どもたちの学びの質を高め、理解の深まりを重視した授業を目指していきたいと感じた。そのために、「なぜこの授業を行うのか」という授業の位置づけや「今の目の前の子どもにとってどんな意味があるのか」という授業の価値づけといった視点を大切にしながら授業実践を行ってみたい。また、自身の授業やその振り返りを通して、子どもの学びのプロセスを知り、それに応じた指導法を日々考えていく中で子どもの成長を実現させていきたい。

教科授業実践コース 山口 裕貴

今後の自分の研究において、今回のポスター発表はとても参考になった。まず、自分の興味があるもの、気になるものを中心に先輩方や先生方の研究がどんなものかを知ることができた。その中から研究方法や調査の仕方、わかりやすいポスターのまとめ方など、新しい発見がたくさんあった。ポスター発表を通して、自分の研究の課題や不足している点、改善点なども見え、とても有意義な時間であった。自分の校種や教科だけでなく、様々な校種や教科を通して、意外な発見や学びがあった。今後も自ら視野を広げて研究に生かしていきたい。

教科授業実践コース 小洞 琢己

11月4日に行われたポスターセッションでは、普段見ることのない教育学研究科に所属する方々の研究を見ることができ、また気軽に質問ができるため、密度の濃い交流もできた。ポスターセッションは発表者には発表し質問を受けることで、自分の研究の深化を図ることができる。参加者には、自分と違う校種・教科の研究に触れることで新たな視点を獲得し、これからの研究の参考にするということについて非常に有効である。私の実践研究は2年後に行う予定である。それにそなえて来年のポスターセッションにも参加したいと思う。

教科授業実践コース 岩崎 紗知

今回の「学習指導要領改訂の動向について」の講演を拝聴し、今後の教育の在り方について深く考えることができた。その中で、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」と示されている「育成すべき資質・能力の三つの柱」については、相互に関連してあり、その三つを意識して高めていかないと身につけられないということを感じた。従来の知識や技能の習得に加え、子どもの学びのプロセスを大切にし、変化の激しい社会の中で生きて働く知識として子どもたちに身につけさせるための授業を目指していきたい。

教科授業実践コース 上野 広恵

次期学習指導要領の改訂に向けて、育成すべき資質・能力の三つの柱が示されていたが、社会に関わる人間性の育成や、社会に活かせる知識・技能を得ること、そしてその知識・技能をどのように使うかということが現行のものに比べて、より重視されているように感じた。私は中学校音楽科教員を目指しているが、音楽の授業の中では音楽表現の創意工夫のための技能を身に付けることや、音楽を愛好する心情を育む等の目標があるが、社会にどう活かすか不明確なことが多い。社会に活かせる音楽の授業を目指して、授業づくりを行ってみたいと感じた。

教科授業実践コース 佐古 まりあ

私はこの講演を通して、授業づくりとはなにかを改めて考えさせられることとなった。経験が浅い私が抱く授業づくりのイメージは、教材研究を重ねて指導案をきっちり作り、その通りに行うことが大切、ということが強かった。それもちろん大切だが、子どもへの反応によって学びが期待できる場合は路綫変更をし、指導案を考える時点で子どもが自分たちで学びを深めていく余裕のある活動を設定することも効果があるということも、実践例をもとに学ぶことができた。子どもの学びのために自らも授業について学び続け、授業力を磨き続ける教員になりたい。

教科授業実践コース 川島 美穂

「主体的・対話的で深い学びの授業」とはどのようなものなのか。授業をつくり、実際に子どもに授業を行うとき、本当にそれは子どもが学びにつながっているのだろうか。この講演を聴いて、授業づくりの認識を改めなければいけないと感じた。「主体的・対話的な要素を授業に盛り込んでいくつもりでも、ただそれを形式的に行えばいいわけではない。重視すべきなのは、暗黙のような表面的な浅いものではなく、実りの深い学びである。子どもから柔軟な思考を引き出し、対話から深い学びの機会を与えることが「授業」であるのだと感じた。